HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	信頼で世界をつなぐ : JICAの国際協力と地域との連携
Author(s)	石丸, 卓; Ishimaru, Taku
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 11, 3-8
Issue Date	2022-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84787
Type	departmental bulletin paper
File Information	020REBN_11_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第 11 号
北海道大学　2022. 3

＜講　演＞

信頼で世界をつなぐ
―JICA の国際協力と地域との連携―

石丸　　卓
JICA 北海道　所長

JICA 北海道の石丸と申します。よろしくお願いいたします。

本日は，「信頼で世界をつなぐ」ということで，JICA の国際協力の取組，そして地域の連携について最初に私からお話ししたいと思っています。

最初に自己紹介です。私は実は北大病院で生まれまして，小中学生時代を江別市で過ごしております。それで，函館で高校時代を過ごした後に東京のほうに出てきています。大学卒業後に，主として中南米・カリブ地域の，ODA のメニューの一つであります円借款事業に，いろいろ配属先の名前は変わっているのですが，従事しておりました。円借款事業については，後ほど少し触れたいと思っております。

そして，今年の 4 月から JICA 北海道で勤務を開始しております。これまで海外経験は，やはりラテンアメリカの事務所が多くて，**最近までパナマという暖かい国にいました。暖かい国が長かったので，これから始まる長く寒い北海道の冬にどういうふうに備えようかと考えているところでございます。**

本日は，「持続的な世界をつくるために」ということを念頭におきながら，最初に SDGs の考え方について少し触れた後で，「信頼で世界をつなぐ」ということで，JICA がどのような国際協力の取組を行っているのか，そして，「北海道からできること」と題しまして，JICA 北海道がどういうことを行っているのか。そして最後に，北海道の課題について JICA 北海道がどのような貢献をしたいと考えているのかということについて，簡単ではございますがお話をさせていただきたいと思います。

SDGs の考え方

最初に，このカラフルなロゴタイルマーク，そしてカラフルなピンバッジをいろいろなところで見かけるようになりました。（**図 1**）持続可能な開発目標（SDGs）の象徴でございます。

これは，いろいろな解説本も含めて情報があふれておりますけれども，2030 年までに貧困を撲滅し，持続可能な社会を実現するということで，先進国を含む世界共通の目標です。1 番目の「貧困をなくそう」から 17 番目の「パートナーシップで目標を達成しよう」という 17 ゴールが掲げられていて，それにひもづく形で 169 の細かなターゲットが定められております。このターゲットには，定量的に数値目標として掲げられているものもありますし，こうい

図 1

う社会をつくろうということで定性的な呼びかけがされているものもございます。そこに流れるキーワードは，「誰一人取り残さない」ということです。そして，これは援助機関のみならず，各国の政府，自治体，企業あるいは大学，研究機関，さらには市民の皆さん，地球上のありとあらゆるアクターによる連携・協働の取組が期待されているわけです。

ちなみに，このSDGsが生まれる前にMDGs，ミレニアム開発目標というのがございました。これは，2015年までに，ほぼSDGsと同じ思想で8つの目標で，開発途上国の課題を解決するために先進国を含めてどのような協力・支援が必要なのかということでした。おおむねこういう観点から定められた，言うなれば開発援助コミュニティにおける支援する側，される側という関係性の中で出てきた共通目標だと。私は，そういうふうに理解をしております。

SDGsが示唆するところ，言っているところ，これは冒頭平本センター長からもご紹介がありましたけれども，やはり開発に関する長年の議論と教訓の帰結であると考えております。ちょっと難しい言葉になってしまいますが，開発というのは環境に対するものである，あるいは，政府の取組は市民の取組と相対するものである，あるいは，先進国と途上国の利害が対立する，あるいは，駆け引きがある。さらには，公的部門と民間部門の役割はこうあらねばならないなど，これは，すみ分けの問題です。こういった対立的に語られがちな概念から，多様なアクター，いろんな人の知恵と技術とアイデア，そういうものを持ち寄りながら連携・協働して持続的な社会をつくり上げていこうと，こういうふうに考え方が進化してきたのではないかと考えます。

もちろん，批判的な立場の意見もあることは承知をしております。しかし，やはりここに至るまでには，開発とこういった議論の教訓があって今に至っていると私は理解します。

さらには，これが援助コミュニティの枠組みを超えた広がりに今やなりつつあるというところは注目されるべきだと思います。

もはや人類の合い言葉となっておりますし，それで皆さんが自らのライフスタイルを振り返る。そして，SDGsに貢献し得る商品やサービスを求めるように消費者行動も変化してきている。さらには，そういうことにコミットして積極的に取り組む企業。そして，恐らく大学であっても，自治体であっても，そういったものに参加している，貢献している，ということがそれぞれの価値をはかる尺度にもなりつつあります。したがって，そういうアクターは一生懸命それを発信したり，発信の方法を多様化したり，そういう現象が見られていると思います。

ここで想起したいことは，世界はつながっているということです。私たちの暮らしは，どこかの国の資源，環境，誰かの生活あるいは労働と無縁ではないということです。私たちが着ているもの，あるいは食べているもの，使っているもの，これはどこかの国の資源，環境，誰かの労働と無縁ではないということに思いをはせる必要があります。

そして，それは，もはや国際協力は特別な誰かが行う特別な取組ではないということを示唆していると思います。以前であれば，帰国子女で英語を自由に操れる人が外国で活躍する，そういうことが国際協力のイメージと捉えられたこともあったのではないかと思います。ただし，今この流れの中では，地元にいても，必ずしも外国でなくても，地域の課題にどういうふうに向き合うのか，それに対してどういう解決策に取り組むのか，そういうことをほかの人とどう共有をして，みんなでよりよい世界をつくっていくのか。こういった営みの中から国際協力というのは生まれていくのではないでしょうか。まさに私たちの足元に国際協力があると，そういう時代になっていると思います。

したがって，私たちには何ができるのか，想像力と創造力，クリエイティビティを持って考

えてみるということが期待されているのではないかと思っています。

JICA の取組み

そこで，今回のテーマ「信頼で世界をつなぐ」という言葉で，JICA がどのように国際協力に取り組んでいるのかということをご紹介したいと思います。

JICA は，以前より「信頼で世界をつなぐ」というビジョンの下で，人間の安全保障と質の高い成長，これをミッションとして活動を展開してきています。やはり人間の安全保障，人々が中心に据えられた協力であること，これは，教育，健康，保健，あるいは平和，そういう我々人間が生きていく上で必要不可欠であるものを重視するという姿勢です。社会的弱者への裨益ということもございます。

そして，質の高い成長という意味では包摂的である。今では「インクルーシブ」という言葉も標準語になりつつありますが，そういう社会。そして，それが持続すること。そして，それが強靱であること。こういうことを信念として日本の国際協力というのは取り組まれてきたということです。それは，まさに SDGs が今掲げている理念です。誰一人取り残さない包摂的な社会，そしてレジリエントであること。これとまさに高い親和性があるということで，これは JICA というよりは日本の国際協力がこういう理念の下で取り組んできたこと。これを，ますます自信を持って今後も取り組んでいきたいと思いを新たにいたします。

とはいえ，JICA の国際協力というのは JICA の職員だけがやれるものではありませんし，やっているものでもございません。これは，やはり国内外のいろいろなアクターがお持ちの技術やアイデア，ノウハウ，あるいは資金，そういったものを結集して，それを JICA が今まで培ってきた途上国の公的機関とのつながり，あるいは国内外に持っているネットワーク，拠点，さらには専門人材と言われる専門家の方々，あるいは外国から来られる研修員の方々，そして協力隊のボランティアの方々，こういう方々を通じて，共に力を合わせて途上国の課題の解決に当たる。これが基本的な形になっております。

そこで，こういったパートナーシップを活用して JICA がどんな協力メニューをやっているのかということですが，日本の経験，技術を通じて人材育成を行い，途上国の国づくり，人づくりに役立てていただくという意味では，やはり技術協力というのが大きな柱の一つになります。そして，円借款。これは私が長年取り組んできましたが，経済成長の土台となる比較的大規模なインフラ：空港や鉄道，上下水道などこういったものを整備するためには莫大な資金がかかります。そういったものを長期・低利の有利な融資でもって支える。これが円借款の仕事です。さらには，小規模であっても生活に不可欠な施設を整備する。こうしたことにもお金がかかるわけですけれども，返済義務のない資金を供与することによってそれを支援する無償資金協力というのもあります。

さらには，日本の民間企業の中にも優れた技術や製品でもって途上国の課題の解決に貢献しているということがあります。したがって，JICA はそういう取組を支援するメニューもあります。これについては，この後，東洋農機の大橋さんからもご説明があると思います。

市民の参加協力，これは日本の市民の方々が国際協力に参画される中で途上国の課題解決に貢献いただくということです。典型的なものは，海外協力隊と言われるボランティアの事業です。その他，NGO 等の活動を JICA が支援するということもあります。これについても，後ほど「飛んでけ！車いす」の会の吉田さんからお話しがあると思います。

最後に，国際緊急援助です。これは，人間の生命を守るという意味で，自然災害等の現場に緊急援助隊を派遣したり，水，テント，毛布な

ど必要な物資を緊急に輸送する。こういう仕事もやっているのがJICAです。

そこで，JICA北海道が北海道の特色あるいは強みを生かして何を行っているのかということを少しご説明いたします。

JICA北海道の取組み

北海道は，150年前に本格的な開発がスタートして，短期間で急激な発展を遂げて今があります。この過程においては，外国から優れた技術を導入したり，あるいは国際機関の支援を受けたり，技術的な支援を受けたりといったことがありました。そして，本州とは異なる歴史あるいは風土，その中で北海道が気候条件や土壌に適合するように課題を克服してきた。その経験や技術，プロセスの蓄積は，途上国の国づくり，人づくりに生かすことができる貴重な資産であると私たちは思っています。

さらに，そういったものを活用して，途上国との連携・協働を通じ信頼の絆を築いていくこと，これは，今後の北海道がさらに魅力的である，あるいは持続的であるためにも重要であると考えています。途上国の方にこうした北海道の利点を知っていただき，北海道のサポーターになっていただく，北海道の魅力を感じていただく，そういうことが今後北海道を持続的にしていくという意味においても大事であると私たちは思っています。

そこで，JICA北海道では，今，コロナ禍でちょっと止まっていますが，毎年，年間で約1,000名の途上国からの研修生を受け入れて，北海道の知見あるいは技術を世界と共有し，国づくりに役立てていただくという活動をしています。

例えば滝川国際交流協会さんには，アフリカの方々を招いて，小規模農家のためのアグリビジネス振興という研修を実施いただいています。これは，農家組織の強化などを通じて農業の生産性を上げたり，取れた作物を加工して付加価値をつけて販売することによって収入を向上させたり，そういった取組をご紹介している研修です。

また，旭川の大雪土地改良区では，農民主体の用水管理システムの研修ということで，農民が主体的に灌漑施設の維持・管理をする体制を整備・強化することで農業の生産性を高めたり，持続性を向上させたりなど，こういった知見を，アフリカあるいは東南アジアの方々と共有する機会を持っていただいています。

これは，中米の国々を対象にした，道の駅による道路沿線地域開発の研修です。北海道開発技術センターに実施してもらっているものですが，道の駅を通じて地域の活性化を図っていく，その実践方法を特に中米の国々と共有して役立てていただくということです。実際にニカラグアにおいては，こうしたことを参考にしたモデル事業も始まっています。

こう見てきますと，北海道にお住まいの方々にとっては極めて日常的な風景に見えることばかりかと思います。ただ，ここに至るまでに北海道は試行錯誤を繰り返しながら，今こういう成果になっているわけです。したがって，このプロセスや経験というものは，これから大いに途上国の国づくりに役立つノウハウがぎっしり詰まっていると私たちは考えています。

さらに，途上国からは短期間来日して研修をしてもらうほかに，長期にわたって大学の修士課程あるいは博士課程に在籍して研究をしてもらったうえで，日本あるいは北海道をよりよく理解した，次世代を担う途上国のリーダーを育成する，というプログラムにもJICAは取り組んでいます。受入れ実績としましては，北海道大学，帯広畜産大学のご協力を得ながら，毎年度約70名前後が在籍し勉強をしています。

こうした長期に滞在している留学生に対しては，我々もぜひとも北海道というものをよりよく理解してもらいたいという思いから，最近ではアイヌ文化を通じて北海道を深く理解してもらう地域理解プログラムというものも実施をし

ました。そして，彼らも母国に帰ったときにはこうした体験を通して，多文化共生の取組に対する理解者にもなっていただきたい，そして，よりよく知った北海道のファンにもなっていただきたい，こういう思いで，このような活動も展開しています。

二つ目は，ボランティア派遣です。道産子，若い力，そしてシニアの力，これまでに累計で2,600名の方々に途上国の開発，国づくり，人づくりのために貢献していただいております。今，コロナ禍ですので，なかなか派遣ができない状況になっておりますが，こういった途上国での経験を地域に帰った後に地域の方々，あるいは若い世代に伝えていただく地域還元の取組にも我々は力を入れています。

さらに，私たちのセンターでは小中学校生または高校生あるいは市民の方々を対象に，途上国の現状を知っていただく，SDGsについて理解を深めていただく，あるいは国際協力に関心を持っていただくことを目的としていろいろな開発協力プログラムも実施しております。

そして，「海外で活きる，北海道の経験」ということで，北海道の自治体，NGOあるいは大学が行っている途上国での支援活動，こういうものを草の根技術協力としてJICAが支援させていただいています。これについては，後ほど「飛んでけ！車いす」の会の事例をご紹介いただくことになっています。

例えば，札幌のThe Earth Cafeさんという団体が赤平の胡蝶蘭の栽培技術を活用して南国サモアにおいて新産業を興す，そういう基盤整備をする，非常にチャレンジングで夢のある挑戦をされております。

さらには，これも北大の歯学部の取組が端緒になっているようです。バングラデシュの紅茶農園の労働者とその家族を対象に，これまで口腔衛生に対して関心が薄く，そのために虫歯・歯槽膿漏に起因する疾患，あるいは紙たばこによるがんの発生が多かったこの地の人々に，口腔衛生に関する啓発活動，あるいはそれを基にした健康管理というものを普及させる活動も展開されています。

以上が草の根技術協力の事例になります。

そして，中小企業・SDGsビジネス支援についてご説明いたします。

北海道の地元の企業の中にも，優れた製品・技術によって途上国の課題を解決する潜在力を秘めたものが山ほどあると私たちは思っています。これについては，東洋農機さんの取組について後ほどお話しいただけることになっていますので，私のほうからは，このメニューの概要についてちょっとご紹介させていただきます。

中小企業の中で，途上国で生かし得る技術やアイデアをお持ちの方々が，途上国で基礎的な調査をしたい，あるいはその調査を踏まえてビジネスモデルの素案を策定したい，あるいはそれに沿って実際にビジネスが軌道に乗るかどうか実証をしてみたい，こういう段階に応じていろいろな調査をしていただけるメニューを我々は持っております。皆さんの中で，もし関心のある方がいらっしゃいましたら，ぜひともJICAのほうにまずは相談をいただければと思っております。

北海道の課題

課題は途上国だけにあるものではなく，北海道にも様々な課題が今も，これからも出てきます。とりわけ北海道の場合は，加速する人口減少，そして高齢化の問題が懸念されています。いうなれば，産業や地域の担い手が不足していくということが現実になってきているわけです。500万人を超えていた北海道の人口は，2045年には400万人に減っていきます。そして，その内訳を見ますと，2045年には65歳以上の高齢者の割合が42％を超えます。そのような状況が現実のものとなりつつあるわけです。

他方で，外国人材への依存も今後よりいっそう高まっていくだろうということで，近年も

10%以上の割合で外国人労働者の方々が増えてきています。半数以上は技能実習生と言われる方で，ベトナムの方，中国の方，そしてフィリピンの方が今のところ増えているような状況です。こういう外国の方々に我々の生活を支えていただく，あるいは地域を担っていただく，そういう状況が現実になってきている中で，我々はそういう状況をきちんと理解して受け入れていく準備ができているのかということが今後問題になってくると私たちは思っています。

そのような中で，外国人労働者の方々とそれを取り巻く状況についてはいろいろな問題が指摘されておりますが，我々は相互理解をしながら共に地域を支えていく環境を整備していきたいということで，そういう思いを一つにする企業の方々あるいは自治体の方々，団体の方々と責任ある外国人労働者の受入れプラットフォームというものを立ち上げております。目的は，情報や優良な取組を共有する，あるいは現場で生じているいろいろな課題について解決策を検討する，あるいは関係機関と連携するということです。

技能実習生の方が，身近なところで，我々の生活を支えていただくようになってきておりその数も増えてきています。しかしながら，なかなか地域の方々との交流が持てない，言葉の問題もあるとか，そういうことが指摘をされています。JICA北海道においても，そういうことをお互いに理解しあえるような機会を何とかつくっていきたいということから，6月に技能実習生の方々，ベトナム人の方でしたけれども，そういう方々の人となり，あるいは生活の様子を皆さんに理解いただくようなオンラインセミナーを開催しました。ベトナム料理の料理教室の生中継なども行いました。このようになかなか知ることができない事柄について，皆さんにお伝えしていく機会を今後もつくっていきたいと思っています。

さらには，地域で相互理解を進めていく上では，やはり外国人の方々の日常的な日本語の習得は欠かせないと思っています。他方で，こういう学習機会へのアクセスを持たない方々がいらっしゃるのも現実です。したがって，私たちは今月（昨11月）から3月までの間に基本的な日常会話に関するオンライン日本語教室というものを企画して，実施をしたいと思っています。習熟度別に2コース用意し，8回シリーズで3期に分けてやってみたいと思っています。併せまして，地域の方々との交流あるいは相互理解のためのサイドイベント，恐らく当面はオンラインということになるかもしれませんが，そういったことも実施をして，相互理解の促進，多文化の共生について地域の方々と連携しながら取り組んでいきたいと考えております。

最後に，JICAの概要です。

もちろんJICAは，開発途上国，途上地域の経済・社会の開発に貢献するということもミッションですが，そこで培ったネットワークあるいは経験というものを日本の地域の課題解決のために還元し，そのことをもって我々も地域に貢献していく，これも重要なミッションだと思っています。職員数も2,000名を割っておりますが，専門家の方々，いろんな方々の意見を踏まえて，ご協力いただきながらこういった活動に取り組んでいきたい，そういうふうに思いを新たにするわけです。

JICA北海道は帯広と札幌に拠点があります。途上国に関する情報，あるいは国際協力に関する展示，SDGsに関する展示ももちろんございます。今はコロナ禍で営業制限がありますが，併設されているレストランで世界の料理を味わうこともできます。お近くにおいでの際は，ぜひ一度遊びに来て，御覧になっていただいて，お話し等ができればと思っておりますので，楽しみにしております。

私からは以上です。樋渡先生，お返しいたします。